

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

第2回 只者ではない者たち：坂倉準三という建築家のいる鎌倉の神奈川県立近代美術館

兼松紘一郎（建築家）

書き終えて考えることがある。鎌倉の近代美術館を巡る物語には、戦後の復興に全身をかけた一人の男と、それを受け止め「人間の幸福のために建築を創る」事を胸に秘めた建築家と其の志を継いだOBが居る。東北関東大震災で被災された方々へのお見舞いとともにも復興を心より願うものです。(2011.3.16 兼松)

坂倉準三という建築家がいる。1901年（明治34年）に生まれ、今から45年前になる1966年（68歳）に亡くなっているのだから、いた、と過去形で書かなくてはいけない。だが、その志つまりフランスの建築家ル・コルビュジエに学んだ坂倉が受け継いだ「世界の現代建築の中で、人間の幸福のために建築を創る」という建築思潮の源流は、存続している坂倉建築研究所やそのOBに見事に引き継がれており、坂倉準三の存在を今なお際立たせていて「いる」と書きたいのだ。日本のモダニズム建築構築の一翼を担い刺激を与えた建築家は沢山いるが、これは極めて稀なのである。

坂倉はなにを建てたのか。鎌倉に「神奈川県立近代美術館」を建てた。

白い四角い箱といわれる瀟洒な本館が、鶴岡八幡宮の平家池に張り出して建っている。15年後に増築された高耐候性鋼による柱と梁を外部に露出させた新館とは、池の上の渡り廊下によって繋がり、この神奈川県立近代美術館（以後鎌倉近美）は境内の杜に囲まれて燦然と佇んでいるのだ。



神奈川県立近代美術館（左：本館，右：新館）

無論、鎌倉近美だけが坂倉ではない。

1940年（昭和15年、翌年真珠湾を爆撃して太平洋戦争に突入する前年だ）に事務所を開設し、生涯400を超える建築をつくった。そのジャンルは多彩で、神奈川県庁舎、羽島、伊賀上野という市庁舎や岐阜や芦屋の市民会館などの公共建築、品川の駅前の遺作となったホテル・パシフィックなどと共に、名古屋の近鉄ビル、渋谷駅や東横の入っている東急会館、そして新宿西口広場などの建築と言うより土木的な都市的スケールの構築物にもトライしたが、関連してつくった小田急新宿駅、小田急百貨店などと共に、あまりにも当たり前前の都市風景となっていて設計した建築家の存在を意識させることもない。でも建築家の僕からみると、どの建築も坂倉だ。手すりや壁の手触りや色、コンクリートの組み合わせによる窓周りのバランスは、当たり前だと言い切れるほど味わいが深い。地についているのだ。

坂倉は一高から東大の文学部美術史学科に学んだ。卒論に「ゴシック（ゴシック）建築」をテーマにする、と同級生で後に初代西洋美術館館長となる富永惣一とみながに言ったといわれる¹⁾。建築に取りつかれたのだ。それなら時代にトライしているコルビュジェだということになるのが坂倉だ。

戸田健介という早大を出て近衛歩兵第一聯隊で同僚となった民俗研究者の興味深い一文がある。「俺はル・コルビュジェの弟子になって、建築家になってみせる。小便をしにパリへ行くのではないから、少なくとも五、六年はみっちりやってみせるぞ」などと気炎を上げた、というものだ。そして銀行の円柱を贅物醜悪と罵倒してやまなかった、と書く。文学青年だった戸田に、坂倉はフランス語を教えた。語学をやる



建築家坂倉準三

にはY本に限ると坂倉が丸善から買ってきてくれたカーマストラなどの性典を書き写し読み耽けたというのだ。そして坂倉が船で最初の渡航をしたときに、同僚だった詩人村野四郎とともに歓送する麦酒を渋谷で飲んだが金を払ったのは坂倉だったと慈しむように述べる。この一文は「兵隊友達の坂倉準三君

の逝去を悼む」という弔文だが、日本建築家協会（JIA の前身）の会長もやり、初心を見事に貫徹したと感慨深そうだ。

東大の後輩であり、坂倉事務所開設の翌年 ^{すずきこうじ} 鱸 恒治と共に入所した駒田知彦は、近美 100 年の会（後述）の会報のためのインタビューで笑みを浮かべながらこう述べる。坂倉さんは素封家ですぐに日本に呼び戻されたが、僕たちはフィリピンで塹壕堀だものね！

近美だ！

さて近美だ。近現代美術に魅かれ何度もこの美術館に足を運ぶ人は沢山いるが、平家池に面した一階の空間が好きで、そこで一休みをしながら天井の揺れる池の波紋を楽しんだり、池に浮かぶ小島の紅葉を愛でた人も多いただろう。自然と建築が一体となり、どこかに桂離宮を思いおこさせるこの空間は、コルビュジエの提唱した「近代建築五原則」²⁾の一つ、ピロティ³⁾である。イサム・ノグチの彫刻「こけし」のある中庭と絶妙な開口寸法で繋がっている。美しい空間を生みだしているピロティ



国立西洋美術館の設計のために日本を訪れたコルビュジエは、弟子のつくたこの中庭に暫し佇んだ。弟子であった坂倉の建築を慈しむように想い遣ったに違いない。そしてつくった西洋美術館のスロープのある吹き抜け空間は、この中庭の高さと幅の寸法も類似しているのだ。この西洋美術館は重要文化財に指定され、世界遺産になるのを待っている。

退所した坂倉は 1937 年、パリ万博で師コルビュジエのアトリエの片隅を借りて設計をした日本館で、建築部門でのグランプリを得て世界に日本の建築家の存在を知らしめることになる。坂倉と共に、前川國男、早稲田で教鞭をとる吉阪隆正という弟子のサポートによってこの西洋美術館が建てられた。前川は後にこの美術館の前に東京文化会館をつくる。このコルビュジエの弟子どもはまたなんとも只者ではないのである。

只者ではない男

只者ではない男がもう一人いる。この美術館を建てさせた当時の神奈川県知事内山岩太郎である。荒廃したまちに人のよりどころとなる文化を築きたいと戦後間もない1951年、鎌倉の鶴岡八幡宮から借地提供を受けて、境内に時代を切り開く「近代美術館」を建てたのだ。

坂倉は鋼材リストによって設計をしたが、その鋼材がなく施工した横須賀の馬淵建設が保管していた米軍基地から設計値に近い鋼材を持ってきて、北村脩一と共に設計を担当した駒田知彦が再計算をして建てたのだという。そういう時代だった。この美術館は公立としてはパリ、ニューヨークに継いで世界で3番目の近代美術館、ここの学芸員の多くが現在日本各地の美術館館長として活躍している。建築は美術家という「人」をも育てるのだと、美術史家が眼を剥きそうなことを言いたくなる。

2001年、借地返還は2016年とまだ15年も先だが、葉山に近美葉山館ができ、この鎌倉の美術館の継承発展を願って、美術史家高階秀爾を代表に僕が事務局長となって「神奈川県立近代美術館100年の会」（通称、近美100年の会）をつくった。名称は発起人会で駒田が、50年を経た近美があと50年、近美100年のためにと杯を上げたことによる。10年を経て鶴岡八幡宮の宮司さんとも信頼関係が築けた。

時が経つのは早い。敷地返還まであと5年となったが、1966年二代目館長土方定一の肝煎りによって、鎌倉の杜の見えるガラスを多用した彫刻の室内展示を目指して建てた新館が、鉄骨の傷みによって閉館されたのだ。さてどうするか。坂倉と近美100年の会の出番でもある。

近美は原点である

西沢文隆、阪田誠造、太田隆信、などなど冒頭に記した坂倉に率いられてその志を継いだ建築家は数多いが、その一人、在所中に戸尾任宏と共に近美新館を担当した室伏次郎は「近美100年の会」の会報にこう書く。坂倉さんとあの池に面するテラスに佇んでいるとき、突然「僕は日本的なものをつくろうと目指してつくったことは一度もないのです。日本に生まれた僕らは自ずと肉体として、感性は日本的であらざるを得ないのです」と言われた。

坂倉亡き後、事務所を率いてその人柄と作品によって世に坂倉ありを伝えた西沢文隆を継いだ阪田誠造はこういう。「坂倉建築研究所として坂倉準三の延長上で仕事を続けてきた私たちにとって、鎌倉近代美術館は一つの原点である」¹⁾。坂倉の原点は、日本のモダニズム建築の原点だと言ってもいいだろう。2009年鎌倉近美で行われた坂倉準三展での中庭で、子息坂倉竹之助を囲んだOB連の面魂をみて欲しい。でも笑顔が一杯だ。皆仲がいいのである。

(兼松設計主宰 DOCOMOMO Japan 幹事長)



坂倉準三展の際に記念に撮った一枚。事務所のOBが集まった

- 1) 坂倉準三とは誰か (松隈洋著 王国社刊より)
- 2) それまでの装飾的な様式建築とは一線を画し、もっと自由に空間を構築しようと発せられた、モダニズム建築の基本概念。

「ピロティ」

「屋上庭園」

「自由な平面」

「連続水平窓」

「自由なファサード」

- 3) ピロティ：一階を柱だけの吹き放しにした空間

※ 写真：坂倉準三・坂倉建築研究所提供 他の写真・兼松紘一郎撮影